

図書館だより



「國短みちのきち」完成！

図書館スタッフ／総合教養学科2年
久保 麗音

今年度図書館ワークスタディの集大成として「國短みちのきち」を作りました！

皆さん4月に配られた「私の一冊」を覚えているでしょうか？あれは「本を身近に感じて欲しい」という思いから発足した國學院大學のみちのきちプロジェクトによって作られた一冊です。そこにはプロジェクトに賛同してくれた著名人が自らの経験を踏まえ、若者がいま読むべきであると考えた本が紹介されています。そこに掲載された約100冊の本を集め、ワークスタディ皆で作ったポップを添え、本学図書館2階にみちのきちコーナーが完成しました。

本には著者の考えだったり、伝えたい何かであったり、何かしらの思いがこめられているものだと私は思っています。「私の一冊」で紹介された本たちはそれらに加え「紹介した人の思い」がこもった特別な一冊といえるのではないのでしょうか。

なんでも検索すれば知りたい情報が手に入る時代ですが、自分が動かなければ手に入らない、存在を知ることすらできない情報が、きっとみちのきちにはたくさんあると思います。もしかしたらそこで得たものから小さなきっかけだったり何かを掴むかもしれません。

普段は課題やレポートなどの参考として本を読むことはあっても、趣味の一環としてだったり、または課題とは関係なく、本を読む機会がなかなかないのではないかと思います。だからこそ、たまには“必要だから読む”のではなく“自分の可能性を広げるために読む”ことをしてみませんか？



【図書館からのご案内】

- 参考図書や館内閲覧に指定されている本は貸出ができません。
- 入館する際や貸出手続きの際に学生証・利用証が必要となります。忘れずにお持ちください。
- 延滞している場合には、図書の貸出はできません。また、延滞した際には、すべてを返却し終えても、翌日まで貸出不可となります。

※詳しくは利用案内をご確認下さい。

【発行】

國學院大學北海道短期大学部図書館
滝川市文京町3丁目1番1号
TEL 0125-23-4111 / FAX 0125-23-5590
<http://www.kokugakuin-jc.ac.jp/>



- 開館時間
月一金 9:00—18:30
土 9:30—16:00
- 休館日
日・祝日、他に大学指定の休日

國學院大學北海道短期大学部は、高校生以上の地域の皆様に図書館を開放しています。利用ご希望の方は、運転免許証など、ご自身を証明できるものをお持ちのうえ、カウンターで利用登録をしてください。詳細は、図書館にお尋ね下さい。

巻頭言

私の読書法

学長 田村 弘

私には、学問としての読書、趣味としての読書の経験がほとんどない。

読書法の第一は、仕事のための読書である。「学」より「術」を重視する。

長年にわたって地方行政に携わってきたから、読書は仕事の一部である。たいていは新しい仕事が多くて、その時々テーマを絞って日頃から文献を集めておく。私設の図書館である。家の床が耐え切れなくて落ちてしまったこともあった。

指示が出ると夜を徹してにわか勉強を始める。これまでの経験値と数冊の本や文献からの基礎知識を生かして企画書を書きあげ仕事に取り組む。

こんな習慣は、茶道、陶芸、園芸、天体観測、ゴルフなどを手掛ける時にその入口となったし、これらのことは仕事の上でも随分役立った。田中角栄がゴルフを始めた時に、秘書に「ゴルフの本を3貫目(1貫は3.75kg)買ってこい」と指示して入門書を読むことから始めたを知って、思わずほくそ笑んだ。

私の第二の読書法は、好きな作者の本をドサッと買ってきて積んでおくことだ。読んだ本も読まない本もたく



さんある。こんな全集物は十年ほど前に思い切って処分して和辻哲郎と小林秀雄全集だけにしておいたが、最近は読む自信がなくなってきたからそのうち処分する羽目になるだろう。

これまで、私の読書法には基礎的な教養を高めるための読書はほとんどなかった。近頃は、その反省から主に日本の歴史・宗教・古典・児童書を中心に読んでいる。人間の基礎力をつけるために大切だと感じたからだ。遅すぎは否めないが、「学び始めが遅いからと諦めてはいけない」と本居宣長も書いているから、自らを慰めている。

これからは、本を楽しみながら読む生活をしたい。出来るだけ多くの日本語に接して、日本のカタチ、日本人が培ってきた美しい言葉や情緒、多様な表現力を楽しみたい。

読書法に関する本も随分読んだ。その中で、「加藤周一著『読書術』岩波書店刊同時代ライブラリー139」は今も持っている。古い著作だが一読の価値がある。

平成30年度の図書館

平成30年度 蔵書数(平成31年3月1日現在)

合計	和書	洋書	視聴覚
82,519冊	74,506冊	6,881冊	1,132点

和書540冊、視聴覚資料5点を新たに受け入れ、平成31年3月1日までの蔵書数は上記のようになった。

和書の内訳は、固定資産図書43,141冊、教育研究図書31,365冊。洋書は、固定資産図書5,422冊、教育研究図書1,459冊。視聴覚資料は、固定資産183点、簿外949点となった。

年度末には、さらに新たな図書を受け入れるほか、5年間所在が不明である紛失図書・不要になった複本等を除籍予定。

私たちの読むヨム

私の図書館歴

国文学科2年 田中 彩子



物心ついた頃から、本を読むのが好きだった。生活の一部であったと言っても過言ではない。特に、週に一度の図書館通いが何よりの楽しみだった。

幼児期は、幼稚園の近くにある図書館で『こどものとも』や『おひさま』などの雑誌をよく借りていた気がする。

引越してから小学校中学年までは、市立図書館に通っていた。鬱蒼とした木々に囲まれ、ひっそりあったレンガ造りの建物。少しカビ臭く、一面に本棚が並ぶ様子は隠れ家みたいで、わくわくした。貸出カウンターの右側、絵本や児童書のコーナーを主な拠点にしていた。漫画は、ザ・図書館という感じで一昔前の作品ばかりだったが、おかげで『火の鳥』に出会えた。今でも大好きな作品だ。絵本を卒業したあと、児童書を読む日々が続いた。日本だけでなく、海外の作品も読んだ。なぜか『ハリー・ポッター』シリーズはろくに読まず、『ナルニア国物語』を読んでいた。一時、さくらももこさんのエッセイばかり読んでいたこともある。一般書のコーナーは奥まった場所にあり、行くのは母を呼ぶ時ぐらい。「大人」の世界だと感じていた。

その図書館が取り壊されることになり、一時的に別の図書館に通った。同じ市内でも明るくて新しいそこは、ヤングアダルト向けの本が豊富だった記憶がある。新しく移転した図書館は二階建てで天井が高く、随分

おしゃれな空間になっていた。講談社のYAシリーズやライトノベルに手を出し始めた時期だ。中学生になってからは、主に勉強目的で通った。息抜きと称した読書のほうがはかどり、課題はろくに進まなかったが。それから忙しくなり、ネットで予約するようになってからはだんだん足を運ぶことがなくなった。最近は帰省中に一度は、図書館に行っている。本を選ぶ時間、というのは贅沢だと気づいた。

読む本を選ぶ時から、読書は始まっている。古今東西の本が詰まった図書館は、思いもかけぬ本と出会える最高の場所だと、私は思う。



本学に所蔵していない本を読みたいときは、次の方法があります。詳しくは職員までお尋ねください。

①購入希望(リクエスト)を提出する

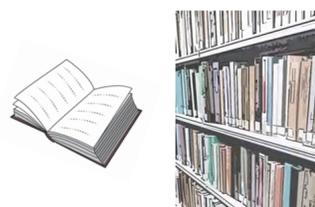
本学学生・教職員に限りリクエストを受け付けております。ただし、すべての本が入るわけではありませので、ご了承ください。また、入るまでに時間がかかることがあります。

②他館から取り寄せる

道立図書館などから取り寄せて借りることができます。

③公共図書館・大学図書館に行く

学生証・身分証明書・紹介状などが必要となる場合があります。



渡 正元著 『現代語訳 巴里籠城日誌』

総合教養学科1年 池内 壮臣



私が好きな本のジャンルは時代小説だ。人が次々と亡くなっていく描写も多いジャンルであり苦手意識を持っていたが、読み続けていくうちにその時代の人が持っていたであろう心に決めた信念というものから目が離せなくなっていった。話の展開の早い本やハラハラ・ドキドキする本が私には合っており、時代小説は私にぴったりの本だった。

中でも私が好きな時代は動乱の時代と言われる、幕末の新選組が主人公となっている小説である。

私が一番印象に残っている本は、司馬遼太郎著の『燃えよ剣』である。この本は私が中学生の時に学校の図書館で借りて読んだ本であり、時代小説に惹かれていききっかけとなった本だ。初めて読んだ当時は知らない言葉が多く、読んでいて面白くないと感じていたが、読み始めたため最後まで読んでみようと思い読み進めていった。話の舞台が幕末から明治へと変

わる頃には言葉の意味が徐々に理解できるようになり、その時代の人を持っていた信念というものから目が離せなくなり惹かれていった。その後には新選組が題材とされた小説やドラマを見る機会が増えていった。

私は休み時間の度に本に没頭し、読み終わると図書館に通い、通学時間も本を読んでいた。私は知らない間に本から新しい言葉を学んでいたと思う。本を読むという事は自分に余裕がないとできない事であり、今の自分はあまり本を読む時間を作れていない。毎日10分という本を読む時間を作り、読書ということを大切にしていきたい。

時代小説

幼児・児童教育学科1年 佐久間 美有



私がこの本に出合ったのは夏休み実家に帰省していた時のことである。父親の蔵書にあったこの本の変ったデザインにひかれた。自分が伝記などの、特に世界史にまつわる本が好きだったこともあり、この本を滝川に持ち帰り読んだ。

この本は明治初期、ナポレオン3世帝政下フランスのパリに留学中だった安芸藩(広島)藩士の渡正元(わたりまさもと)が、多くの留学生が仏国外へ避難する中、パリ市中に留まり、フランスが敗戦していく様をありありと記録したものを現代語訳したものである。

印象に残っているのは、フランス皇帝ナポレオン3世がセダン要塞で包囲され開戦2カ月もたたずして降伏し、パリが包囲された後のフランス人の対応である。渡正元は「わが日本の魂をもつてみるに、もし国の帝が敵の虜となったときは、全国民が憤り、わが身を

忘れ仇を討つ。ところが、文明開化が極まった際の人心は道義疎かであること、かくのごとしの状態に至る」(巻の二)と記している。また、当時のパリに籠城している民衆はナポレオンがパリに帰ったのならば、直ちに民衆によってこの戦争の責任を取って殺されるだろうとも記している。この日本の天皇を敬い尊ぶ姿勢と、皇帝に対してでも契約という立場をとる騎士道や、市民であっても皇帝を批評するという精神の差が明確に出てきたところがとても面白く、印象に残った。

この本を読み、世界史の授業でも断片的にしか教えられなかった普仏戦争について詳しく知り、武士道と騎士道の精神の差を垣間見ることができた。